

## ■追悼文

### 関口雅行先生を偲んで



田無での退官記念パーティーの二次会にて奥様と平尾先生と

関口雅行先生が、平成28年4月2日朝に西巣鴨のご自宅にて逝去されました。先生は昭和13年8月27日に東京で生誕され、戦時中に埼玉県に疎開した時期を除き、ご生涯のほぼ全てを東京で暮らされた生粋の江戸っ子でした。先生の煙草を燻らしながらの洒落な語り口に、古典落語を聞く思いであった方も多かったのではないかと思います。

先生は、東京大学野上研究室で原子核物理学を専攻後、1968年より東京大学原子核研究所において平尾泰男先生の片腕として田辺徹美先生とともにSFサイクロトロン建設に参画され、1974年、建設を成功に導かれました。後年、平尾先生は、「自分でもやり方が思いつかないときは関口君に頼むと、いろいろ考え抜いて何かしら答えを持ってきてくれた。」としばしばおっしゃっておられました。SF完成後は、核物理の実験を手がけられるとともに、オランダKVIに滞在し、実験の改善のためスペクトロメーターの研究にも取り組まれました。

1980年代にサイクロトロン入射用に多価ECRイオン源が注目を浴びようになると、パイオニアの一人としてSF-ECRイオン源を開発し、大城幸光先生、小柳津充広先生、東條栄喜先生たちと多種、大強度のビームを提供することに貢献されました。先生は、いつも論理的で周到な準備を自他に求められましたが、失敗してもそれを引きずらずに解を見つける現実的な気性も合わせお持ち

で、なかなか計算に乗らないイオン源という装置とうまが合っていらっしゃったのかもしれませんが。その後も他大学、研究所や企業と多くのイオン源開発を手がけられました。国際会議でも委員を歴任され、1995年には矢野安重先生、中川孝秀先生の協力を得て核研と理研の共催による第12回ECRイオン源国際ワークショップの議長を務められるなど、長く本分野で活躍されました。

数か国語に堪能で海外の知己も多く、本学会誌Vol. 12, No. 1のご自身による巻頭言の通り、国内外の求めがあれば快い協力を常に惜しまれない方でした。重粒子線がん治療に対しては、放医研に異動された平尾先生の求めに応じてHIMAC建設委員会に加わるとともに、山田聰先生、服部俊幸先生や私とともに医療用のNIRS-ECRイオン源の開発に自ら携わられました。このイオン源は今も現役で、約10,000名の患者さんの9割は先生が開発されたビームで治療を受けたこととなります。

核研再編に際しては田無から和光への移転を準備し、1999年に東京大学原子核科学研究センター教授として定年退官されました。熱心な指導は東大時代より多くの学生、技術者に慕われるところで、退官後も立教大学、東京農工大学で教鞭をとり、本分野の人材育成に大きく貢献されました。2009年からは放医研において外国人医療関係者の指導も手がけられました。晩年、動脈瘤の薬による治療を受けるものの生涯お元気に活躍され、お亡くなりになった前の晩も先生を慕う外国人ポスドク夫妻を自宅に招かれて歓待していたところでした。

ご家族によれば、先生は仕事でも趣味でも関心を惹かれると集中してのめり込まれ、よく勉強されていたそうです。学生にとどまらずお子様たちにも勉強するように厳しくおっしゃっていたようですが、学問の面白さを伝えたいという優しい気持ちからで、朝から晩まで勉強できる場所にいられば、そこが先生にとっての天国でしょうとのことでした。先生のご冥福をお祈りいたします。

北川 敦志（量子科学技術研究開発機構  
放射線医学総合研究所）